月例研究報告

灰の記憶：東埼玉資源環境組合の焼却灰問題に見る〈内側の辺境〉の再生産過程

猪瀬　浩平

巨大都市は、その外側だけではなく、内側にも〈辺境〉をつくる。小熊英二は、中央／辺境という概念が実体ではなく、関係の中で作られ、だから、「辺境」は地理的な意味での東京にも存在するとしている（小熊2012）。本発表は「辺境」との距離を問題にするために、外側と内側と言う区分で分析を試みることで、中央と辺境との〈間〉を考える。2011年３月に始まる東京電力の原子力発電所の事故とそれがもたらした放射能による広範囲の汚染は、廃棄物をめぐる首都圏と東北の不均衡な関係を露にするとともに、首都圏内部で廃棄物が集積される〈辺境〉の存在を浮かび上がらせた。埼玉県東部のゴミ処理場が立地する過程と、その中で忘却されようとする土地の記憶を描く。

戦後、一極集中によって膨張する首都圏にとって、東北は外側の辺境として食糧・都市労働力・鉱物資源そしてエネルギーの供給地であり続けた。一方、屎尿処理場、屠畜場、ごみ処理場、火葬場といった施設は、そこで行われる事柄の必然性から、首都圏の内側につくられる。外側の辺境が地理的遠さによってその存在を目立たなくされているように、内側の辺境は人があまり立ち入らない場所にされたり、人が目を背けるように否定的に意味づけられたり、あるいは一見のどかな装いをまとわされたりしながら、いずれにしろ人びとが素通りするように整備されていく。そして内側の辺境と外側の辺境とされた場所を、まさに〈辺境〉に押しやる構造を不可視なものにしていく。本発表において、外側の辺境とは東北に作られた最終処分場であり、内側の辺境とは東京の郊外都市につくられたごみ処理場である。そして、外側の辺境と内側の辺境が結託してしまう可能性を持った瞬間に着目する。

2011年７月11日———千葉県流山市のごみ焼却施設で排出され、秋田県大館市にある廃棄物処理場で処理される予定の焼却灰に、基準の３・５倍の放射性セシウムが含まれていたことが判明した。この事件が、廃棄物をめぐる、首都圏と東北との非対称な関係を可視化した（原山2014）。本論集で高村竜平は、焼却灰の受け入れる側に置かれた秋田県北東部「北鹿地域」に焦点をあてて、この問題の分析を試みている。

これに対して、本発表は首都圏の内側で、廃棄物を受け入れてきた地域に焦点を当てた。埼玉県越谷市東部地区を取り上げて、廃棄物処理場が立地する歴史的過程を素描した。その上で、その傍らで農業を長年営んできた住民のライフヒストリーに着目し、首都圏と東北との間にあるごとを捉えるための視座を探り、中央と辺境をめぐる議論をより動態的に描写することを目指した。